

『源氏物語』の霊が持つ役割

(平成一〇年度和光大学卒業論文より)

二、『ハムレット』の注目すべき点

一、研究方法

西山智子

この論文のテーマを追求するにあたって、シェイクスピア作『ハムレット』と比較研究することによって手がかりを得たい。作品が書かれた国や文化、時代やジャンルは異なるが、どちらも、今日の文学の土台となる古典であり、人間の真実を描く手法において共通のものを感じるからである。具体的に述べると、『ハムレット』と『源氏物語』では、主人公に深くかかわる人物が、死後に亡霊になって登場し、人間の真実を読者又は観客に訴えるために大きな役割を持ち、物語を動かす鍵となる、という物語構成が共通していると思われる。この論文を書くにあたって、阿部秋生・秋山虔・今井源衛 校注・訳の『源氏物語』日本古典文学全集(小学館)巻一、四と、『ハムレット』シェイクスピア作市河三喜・松浦嘉一 訳(岩波文庫)第七二版一九九七年発行をテキストとした。また、この論文に引用した本文や訳文はすべてこれらの書物によるものである。

『源氏物語』の霊を検討する手がかりとして、注目すべき点を次に述べる。まず挙げられるのは、霊が複数の人に見えていることである。『ハムレット』で現れる霊、すなわちハムレットの父王の亡霊は、物語の初めの第一幕第一場から登場するが、そこで初めて人々に見られるのではなく、歩哨のバーナードとマーセラにすでに見られている。そして彼らが亡霊を二晩続けて見たという台詞が語られ、彼らがハムレットの親友のホレシオに亡霊を見た時の様子を語ろうとした時、亡霊は現れる。これにより、霊がハムレットの幻覚ではないかとは考えにくくなっている。次に挙げられるのは、霊は自己の正体を主張した上で自らの要求を述べていることである。ハムレットの父王の亡霊は、ハムレットの前に出現した時に「われこそはなんじの父の霊なるぞ。」とはつきり名乗った上で、復讐を要求する。最後に、霊の言葉が聞いた人間は超自然とは別な方法によって霊の言葉が信頼できるかどうか確かめられないことに注意が必要である。亡霊は悪魔

りも、もつと確かな証拠がほしい。そうだ、芝居こそ、王の良心をわなにかけるのに、もつてこい手段だ。」という台詞が言われるところがある。ハムレットが亡霊の言ったことを、芝居という超自然とは全く別の方法によって確かめていることに注意が必要である。

つまり、まず亡霊が、自分は真にハムレットの父王の霊であることを主張し、それを聞いたハムレットが芝居という超自然とは別の方法で亡霊の言葉を確かめることで、初めて『ハムレット』に登場する亡霊の言葉は信頼されるのである。以上のことを踏まえて、『源氏物語』の霊を検討したい。

三、『源氏物語』の霊

『ハムレット』で注目した三点から、霊は複数の人に見えているか、霊の言葉や正体を何故信じたのか、霊を見た人はその後どのように対応したか、ということに注意して『源氏物語』の霊を検討したい。

『源氏物語』のなかで、霊が初めに登場するのは「夕顔」である。源氏は一七歳、藤壺を思慕しながらも手が届くはずもなく、六条わたりの女のところに通っていた。六条への道すがらで、知り合ったのが夕顔であった。その夕顔と源氏が愛を

交わす廢院に現れた「もの」の正体については説の分かれるところだが、超自然のものには変わりないという視点で、この論を進めたい。

「夕顔」に登場する「もの」が出てくる夢を見たのは源氏一人であり、夕顔の枕元に現れた時は、右近も見たのかどうかはつきり書かれていない。源氏は「おのが、いとめでたしと見たてまつるをば、尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして、時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ。」という「もの」に対して、後日その光景を夢に見た源氏は「荒れたりし所に棲みけん物の我に見入れけんたよりに、かくなりつること」と思い出すにつけても気味が悪いと思う。

「葵」になると桐壺帝が位を去って、朱雀帝の治世となっていた。源氏は相変わらず六条御息所に冷淡だった。御息所はそれを嘆いて、娘が斎宮に決まったのを機に、伊勢に下ろうかと考える。そんな中、賀茂の新斎院の御禊が行なわれ、源氏もその行列に加わることになった。それを見物に行った六条御息所と葵上との間で車争いが起こり、御息所は忘れがたい屈辱を味わうことになる。

やがて身重だった葵上の出産が近づいた。そこで、源氏は六条御息所の生霊と思われるものと対面することになった。

葵上が「すこしゆるべたまへや。大将に聞こゆべきことあり」と言ったことにより、周りの者が源氏をそばの几帳に入れさせ、左大臣も大官も少し後ろに下がった。この言葉は、周りの者は葵上の言葉として聞いているが、物語のなかでは葵が葵上の口を借りて言ったものとされている。つまり、源氏と霊が二人きりで話すという場面が意図的につくられていく。「すこしゆるべたまへや。大将に聞こゆべきことあり」という言葉は周りの者も左大臣も大官も聞いていたが、霊が「身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂はげにあくがるものになむ」となつかしげに言つて、「なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつま」と詠んだのを聞き、葵上の声や感じが六条御息所そのままに変わったのを見ていたのは源氏だけである。

葵上には六条御息所の生霊がとり憑いたと言われるが、この霊は歌を詠み、六条御息所の仕草や物言いで源氏に語りかけることによって、自己を主張したと思われる。ここで注目したいのは、霊が歌を詠みかけたことである。平安時代、歌は重要なコミュニケーションの手段であり、代作でない限り、歌には詠んだ人の人格が滲み出ていたはずである。霊の詠んだ歌を聞き、六条御息所の仕

草や物言いで語りかけられた源氏は、葵上にとり憑いたのは六条御息所の生霊ではないかという思いを捨てることができなくなつたのではないか。そのことは、六条御息所から葵上の死を悼む文が届いた時、源氏は「つれなの御とぶらひや」と思ひ、「とまる身も消えしも同じ露の世に心おくらむほどぞはかなき」という歌に添えて「かつは思し消ちてよかし」と返事をしたことから窺うことができる。

やがて桐壺院が崩御し、右大臣家の人々が幅をきかすようになつた。源氏は身の危険を感じて須磨へと蟄居するが、ある日源氏の夢に桐壺院が現れた。桐壺院の霊は「などかくあやしき所にはものするぞ」と言つて源氏の手を取つて引き立て、「住吉の神の導きたまふまに、はや舟出してこの浦を去りね」と言つた。そして源氏が須磨に蟄居することになったことを「ただいささかなる物の報いなり」と言い、「源氏が」いみじき愁へに沈むを見るにたへがたくて、海に入り、渚に上り、いたく困じにたれどかかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ急ぎ上りぬる」と言つて立ち去つた。ここでは源氏と同じ夢を見た人がいるとは書かれていないので、「明石」で桐壺院が語つたことを聞いたのは源氏のみであると思われるが、その後、朱雀帝が見た「帝の御夢に、院の帝、御

前の御階の下に立たせたまひて、御気色いとあしうて睨みきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞こえさせたまふことども多かり。源氏の御ことなりけんかし。」という夢の内容が、源氏の見た夢と連動していることに注意したい。桐壺院の夢に対して、源氏も朱雀帝も、桐壺院の霊が悪霊の化けたものであったかもしれないと思ったり、その言葉を疑ったりする様子は全く見られない。源氏はひたすら、桐壺院が夢に現れたことを嬉しいと思ひ、なつかしいと思っている。朱雀帝は夢の中で、桐壺院に睨まれた時、目を合させたのが原因で、眼病を患って苦しむ、やがて源氏を都に呼び戻す。源氏も朱雀帝も、桐壺院の霊の言うことを無条件に信じており、須磨に蟄居した源氏が都に呼び戻されるといふ、物語のなかで大変重要な場面は、桐壺院の霊の存在に強く動かされている。

都に戻った源氏は、「御子は三人。帝、后必ず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」という宿曜の予言が叶いつつあるのを感じていた。しかし藤壺は病に倒れ、帰らぬ人となってしまう。源氏の悲しみは深く、時がたつても藤壺を忘れることができない。成長した紫上がますます藤壺に似てくるのを見て、源氏は藤壺への思慕をつい漏らしてしまう。源氏はそ

らぬさまなれそれながらそらおぼれする君はきみなり」と歌を詠んで泣き叫んだ。その様子は「ただ、昔見たまひし物の怪のさまと見えたり」というものであり、六条御息所の性質である「もの恥じるたる気配」を持つものだった。「葵」と同じように、霊の歌を聞き、その様子を見た源氏には、霊の正体もわかつたのではないかと思われる。また、「若菜」の「かの、また、人も聞かざりし御仲の睦物語にすこし語り出てたまへりしことを言ひ出でたりしに、まことと思し出づるに、いとわづらはしく思さる」という記述から、源氏が紫上にとり憑いた霊を六条御息所のものであると確信していることがわかる。「うつし人にてだに、むくつけかりし人の御けはひの、まして世かはり、あやしきものさまになりたまへらむを思しやるに、いと心うければ、中宮をあつかひきこえたまふさへぞ、このをりはものうく」思うというのが、源氏の六条御息所への気持ちである。「若菜」の霊は源氏に、供養をしてほしい、中宮に言伝けをしてほしいと頼んだ。「若菜」の「物の怪の罪救ふべきわざ、日ごとに法華経一部ずつ供養せさせたまふ。」という記述で、源氏が供養をしたことはわかるが、「鈴虫」の「六条御息所が亡き影にても、人にうとまれたてまつりたまふ御名のりなどの出てくること、かの院にはいみじう隠したまひける」とあるように、

れを女性論の形で「一世にまたさばかりのたぐひありなむや。」と藤壺を褒めたのだが、藤壺はそれを恨んで源氏の夢に出てきたのだ。藤壺はたいそう恨んでいる様子で「漏らさじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」と言うのだった。この夢を見たのは源氏だけである。源氏は夢に出てきたものが藤壺の霊であることや、霊の言った言葉の内容を全面的に信じているように「阿弥陀仏を心にかけて念じ」「いみじく悲し」と思い、「罪にもかかりきこえばや」など、つくづく思う。夢に出てきたのが源氏の慕う藤壺で、その言葉の内容も源氏と藤壺しか知らないことだったので、源氏は霊の言うことを信じたのかもしれないが、ここで注目すべきなのが「若菜」で六条御息所の死霊が紫上にとり憑いたとされることである。

女三宮が降嫁したことにより、源氏と紫上の間には微妙な空気が流れ、やがて紫上は病に倒れてしまった。危篤になった紫上を甦らそうと源氏が必死に加持祈祷をすると、紫上にとりついた霊が現れた。霊はまず「人はみな去りね。院一とこの御耳に聞こえむ。」と言った。これにより、この後の言葉は源氏のみが聞くことになる。霊の正体を問いかけた源氏に対して、霊は「わが身こそあ

源氏は霊の言葉を中宮に伝えていない。中宮は六条御息所が死霊となって現れたことを耳にするが、それはあくまでも人づての噂話として聞いたのであって、源氏から六条御息所の言葉を聞いたわけではない。中宮は六条御息所が成仏できていないことを悲しみ、出家しようとするが、源氏は出家にも反対する。

六条御息所の死霊と思われるものは、紫上に取り付いただけでは飽き足らなかつた。「柏木」に次のような記述がある。

後夜の御加持に、御物の怪出て来て、「かうぞあるよ、いとかしこう取り返しつと、一人をば思したりしが、いと妬かりしかば、このわたりにさりげなくてなん日ごろさぶらひつる。今は帰りなん」とてうち笑う。

この言葉で、女三宮の出家が六条御息所の霊の仕業であったことが判明する。この場面での霊はきわめて悪魔的であり、「若菜」で現れた時とは性格を異にしている。この場面での霊を見たのは源氏ひとりであるかどうかは書かれていないのでわからないが、源氏の反応は「いとあさましう、さは、この物の怪のここにも離れざりけるにやあらんと思すに、いとほしう悔しう思さる。」というも

のであった。

このように、『源氏物語』では、登場人物が霊の言うことを受け入れるかどうかにはばらつきがある。『ハムレット』は『源氏物語』のように、複数の霊が出てくるわけではないので単純に比較はできないが、霊が自分の正体を主張した上で要求を述べ、それを聞いた人間は、超自然とは別の方法によって霊の言葉が真実かどうか確かめた上で要求を聞く、というように理路整然としている。しかし、『源氏物語』のなかの霊に対する登場人物たちの対応は、理路整然としていないと言いがたい。『源氏物語』の登場人物が霊の言葉を聞く時、基準となるのは霊の言うことに信用がおけるかどうかではなく、自分が聞きたいことかどうかである。『源氏物語』の「夕顔」の「もの」の言うことは源氏は聞く気がない。「葵」での霊は、その凄まじさに圧倒され、聞かざるを得なかった感があるが、「明石」での桐壺院の霊が、自らを桐壺院であると名乗るわけでも、歌を詠むわけでもなかったのに、源氏が霊の言うことを全面的に聞き入れ、その正体を疑いもしなかったのは、霊が源氏の会いたい人である桐壺院の姿をして、源氏の聞きたいことを言ったからではないだろうか。同じことが「朝顔」での藤壺の霊にも言える。藤壺の霊の言った内容は、源氏の聞きたいことというわけではなかった

のは、父王の亡霊に殺害の事実を知らされ、復讐を命じられたからであった。では、亡霊が現れなければ、ハムレットは父がクロードディアスに殺害されたことに気づかなかつたであろうか。『ハムレット』第一幕第五場の、亡霊とハムレットのやりとりを振り返ってみたい。

亡霊

「ハムレット、ようく聞けよ。わたしは庭で昼寝の際、へびにかみ殺されたときと発表され、デンマークの全国民の耳も、このような虚言ですっかりだまされているが、じつは、お前の父をかみ殺したへびは、現に今、父の王冠を頂いているのだぞ。」

ハムレット「やっばり、虫の知らせが当たっていたか！ 叔父めが！」

ハムレットは父王の死とクロードディアスの即位を不審に思っていたことがこからわかる。亡霊が現れなくても、ハムレットはやがて自らの不審を晴らすために捜査を始めただろう。そしてハムレットが全力で捜査すれば、クロードディアスが父王を殺害したことは遠からず明るみに出ただろう。父王の無残な死を知れば、亡霊に命令されなくて

が、藤壺は源氏が最も恋慕う人であり、最も会いたい人であった。その藤壺の姿をしている霊のいうことなら、源氏は無条件に聞いたであろうし、正体を疑うことをしなかったのではないか。「明石」での朱雀帝は「(源氏を) 何ごとも御後見と申せ」という桐壺院の遺言に背いてしまったという良心の呵責を抱えていた。気が弱い朱雀帝が源氏を都に戻すことができたのは、桐壺院の霊の言葉に後押しされたからではないか。「若菜」の霊の、供養をしてほしい、秋好中官に伝えてほしい、という願いに対しては、供養はしたが、対面を慮る気持ちが強く、秋好中官には伝えていなかった。「柏木」では六条御息所の霊の言うことは聞いているが、これも、女三宮の出家を自発的なものとするよりも、霊に操られたためとする方が、源氏にとって都合が良かったからではないだろうか。

四、霊が持つ役割

まず、霊が『ハムレット』と『源氏物語』のなかで、物語を展開させるために必要不可欠な存在であったかどうかを検討したい。はじめに『ハムレット』を取り上げる。

ハムレットが、父王が叔父のクロードディアスによって殺害されたことを知り、復讐へと向かったも、ハムレットが復讐に乗り出すことは十分に考えられる。では、『源氏物語』はどうなのだろうか。霊がまず影響を及ぼすのは、源氏にとつて大切な二人の女性、夕顔と葵上の死である。しかし、単に二人を死なせるだけならば、霊を登場させなくてもよかつたであろう。夕顔はともかく、葵上が死亡したのは、当時死亡率が高かつたという出産の直後であり、難産のために死亡したとしても説明がつくはずである。

「明石」では、朱雀帝は夢に現れた桐壺院と目を合わせたことにより、眼病を患い、気が弱くなっていた。そのために退位を考えるようになり、「春宮にこそは譲り聞こえたまはめ、朝廷の御後見をし、世をまつりごつべき人を思しめぐらすに、この源氏のかく沈みたまふこといとあたらしうあるまじき事」と思い、源氏を都に戻すことにした。よつて、ここでは桐壺院の霊は物語を動かすために大変重要な役割を担っている。

「朝顔」での藤壺の霊は物語の展開に重要な影響を及ぼしているというわけではなく、「若菜」での紫上の発病は、霊によるものとしなければ成り立たないものではない。「柏木」での女三宮の出家も、女三宮の柏木との密通に対する罪の意識と源氏への怯えだけでも理由になつただろう。

このように考えると、『ハムレット』と『源氏物

語』の霊が持つ役割は、必ずしも物語を動かすことではなさそうである。それではどのような役割を持つているのだろうか。

『ハムレット』のなかの霊が持つ役割の一つとして、『シエイクスピア 舞台と劇世界』（浜田志保子 著 演劇らいぶらり4 南雲堂 一九八七）の説を支持したい。「第一章 古い革袋に新しい酒」からの引用である。

復讐は亡霊によって導入されるが、亡霊が介在することによって、革袋（物語のテーマ）は古い復讐劇のような単純なものではなくなり、複雑な諸相を与えられて、「新しい」王子が、革袋の提出する命題にまともに対応できるものになっている。

浜田氏の指摘されるように、霊の存在によって、『ハムレット』はありふれた復讐譚から新鮮な物語へと変わった。その他に霊が持つ役割として考えられるのは、観客の興味をかきたてることである。物語の冒頭での亡霊の出現と、そのもの言いたげな様子を見て、観客は物語のなかに引き込まれずにはいられなかったのではないだろうか。

では、『源氏物語』の霊が持つ役割は何だろうか。一つ一つ見ていきたい。まず、「夕顔」では、自ら

からであった。親子の愛情の絆から逃れられなかったわけだが、桐壺院の霊が現れたことにより、源氏はその世に行つてまでも特別に気にかけるほどの存在であると、源氏の優越性が強調されるのである。桐壺院は朱雀帝の夢にも姿を現わし、源氏を不遇にしているという理由で朱雀帝を叱り付けることまでする。源氏の夢に現れた時は励ましの言葉をかけたのに対して、朱雀帝の夢に現れた時には源氏のことと叱るばかりで、朱雀帝に対していたわりの言葉もかけていない。桐壺院の霊が源氏のために現れ、源氏と朱雀帝に著しく差のある態度を見せることで、読者は源氏の優越性を強く印象づけられるのではないだろうか。

「朝顔」の藤壺の霊は、源氏が紫上に女性論の形で藤壺のことを語つたのを恨んで現れた。「苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」というその言葉により、理想の女性とも言える藤壺が、源氏との密通の罪により、あの世で苦しい目にあつていることが明らかになる。密通の罪の重さが改めて実感される場面だが、それは愛執が招いた罪である。

「若菜」と「柏木」のなかの霊について『源氏物語正篇の研究』（大朝雄二 著 桜楓社 一九七五）では、次のような説を提示している。

が夕顔をいざなつた廢院で「もの」が現れ、夕顔の死を招いたことは、源氏のなかで消えぬ悔恨として残り、夕顔を忘れられない存在にしたのではないか。また、源氏と夕顔の恋が絶頂とも言える時に思いもかけぬ形で夕顔を喪つたことにより、源氏のなかに強く夕顔が印象づけられ、夕顔への思いが長く尾を引くことになつたのではないか。それらのことが、後に夕顔の娘の玉蔓を源氏が引き取り、想いを寄せる原因となつたと思われる。「もの」が六条御息所の生霊だとすると、別の役割も考えられるが、それは「葵」の霊と共に検討したい。

「葵」の霊は葵上の出産場面に現れた。霊は六条御息所の姿をし、なつかしげに源氏に語りかけ、歌を読みかけた。あさましい姿になり、葵上を苦しめる生霊となりながらも、源氏への想いを断ち切れない存在として「葵」の霊は描かれる。この霊が体現するものは、人間の愛執ではないだろうか。人間の愛執について説明を重ねるよりも、霊に体現させた方が、何倍も説得力のあるものになつたのではないだろうか。「夕顔」のなかの「もの」も六条御息所の生霊とすると、一層凄味が増してくる。

「明石」で桐壺院の霊が現れたのは「源氏が」いみじき愁へに沈むを見るに、たへがたく」思つた

死霊の出現は御息所の執を伝えるためのものではなく、紫上の病・女三宮の出家が、それぞれ紫上女三宮個人の問題ではなく、源氏に働きかけてきた運命の顕現としての病であり出家であるという意義づけが語られるべき思想であつたのではないか。

死霊の出現が御息所の執を伝えるためのものか、どうか、ということに関しては私見と異なるが、源氏に働きかけてきた運命の顕現としての病であり出家であるという意義づけが語られるべき思想であつたのではないか。」という指摘を支持したい。

このように見ると、霊が現れる状況によってその細かい役割は異なるが、全体としては、物語を動かすことの他に、人間の愛執を体現することが大きな役割ではないだろうか。

『源氏物語』の霊が持つ役割はそれだけだろうか。『源氏物語の主題 「家」の遺志と宿世の物語の構造』（日向一雅 著 桜楓社 一九八三）のなかに注目すべき指摘があつた。

源氏物語の世界は現世的現実だけで完結するのではなく、その延長上に、ないし外周に霊の世界を設定し、両者は密接に交感しあうも

のとしてかたられていた。(中略)死者の霊は現世に対する懸念や懸案によつて、現世とたしかに交感したのであり、そうした霊の存在は現実の人間の世界と等価にみなされていた。(中略)霊界と現世との隔たりや差異は心理的には皆無である。(中略)このような霊の活動は単に物語の構想や展開上での小道具として設定されていたというだけでは足りないだろう。死霊の存在、その現世との交感、現世の側からの適切な対応の必要性ということとは、源氏物語において現世がそれだけで単独に自立し完結するものではなかつたことを示している。いわば現世はもう一つの人間的存在としての他界の眼によつて視られており、それとの調和的關係の樹立によつて安定しうると考えられていたのである。

支持すべき卓説だと思ふ。当時の人々にとつて、霊の存在しない物語は、世界の半分しか描いていないものだつたと思われる。『源氏物語』の霊が持つ役割は、物語を動かすこと、人間の愛執を体現すること、物語世界を完全なものにするための重要な要素となることなのではないだろうか。

注一、『源氏物語』のなかでは「霊」でなく「物の怪」と表現されることが多いが、「物の怪」の定義付けが困難であつたので、より一般的な言葉である「霊」を使用した。

注二、人にとりついたり夢に出てくるもので、正体のわからないものは「もの」、比較的はつきりしているものは「霊」と表記した。

注三、ここで取り上げた他にも、『源氏物語』のなかには「物の怪」という言葉の出ている場面や夢に出てくる霊が登場するが、テーマにさほど関連しないものは取り上げなかつた。